

「^{つぶや}呟くなかれ、私はどうせ・・・」

ヨハネによる福音書 1 章 35～42 節

ウィリアム・バークレーという イギリスの聖書学者を御存じかと思います。日本でもかつて 新約聖書の注解シリーズがベストセラーになり、今なお、いわゆるロングセラーとして 多くの人たちに愛読されています。すでに故人となりましたが、そのバークレーが説教について 次のように語っています。

説教者は 一つの説教のため、週に 4 度の朝をその机で迎える。そして、そこから何物かを生み出すまでは、そこを立つことはない。もし 説教の内に火を焼べることができないなら、その説教こそが火に焼べられるであろう。

説教をする者にとって、なんとも厳しく、^{おそ}怖れさえ憶えさせられる言葉です。と同時に、説教とは本来 そうした誠実なものでなければならぬと、いま一度 ^{えり}襟を正される言葉でもあります。なぜなら、聖書には私たち人間のいのちに関わる、私たちの人生の質を左右する 何より重要なメッセージが語られているからです。聖書は鋭く深く、私たち・人間の深みに語りかけます。そこには私たち・人間のドラマがあり、私たち自身の物語があります。私たちの汗があり、涙があり、喜びがあります。旧約の時を生き、新約の地を歩いた聖書の人々は 今また確かに、姿を変え、装いを変えて この 21 世紀のこの時代を生き、この地を歩いています。聖書に見るのは決して、別世界の 別の人種のあれこれではありません。私たちはそこで この私たち自身に出会い、^{まこと}真のいのちのあり^か処を身をもって示してくださるイエス・キリストに出会います。説教に携わる者が怖れを憶えさせられ、襟を正されるのは、このためではないでしょうか。

時に、こんな言葉を耳にすることがあります。「どうも、聖書の^{みことば}御言葉が生き生きと感じられないんです。なんかこう、迫ってこないんです」。それは、ほとんどの場合、聖書の説明は知っている。つまり、聖書を頭で読むことは知っている。しかし、^{からだ}頭を含めた身体全体で読むことを知らない。そこから来ることが多いようです。聖書を自分に語りかけられているものとして読み、その言葉の中に身を置いて、そこで何事かに出会う。問題は、「それがどれだけの深さで起こっているか」ではないでしょうか。なにも、劇的で派手である必要など、どこにもありません。しかし、形はどうあれ、聖書に向かうとき、私たちはその御言葉に出会い、御言葉と格闘した人々に出会い、そして私たち自身に出会って、聖書が指し示すイエス・キリストに出会うことを求められます。出会いを敏感に感じ取る、熱く渴いた 真つすぐな心が求められます。

かつて、宗教改革者のルターはこう語ったと言われます。「耳の中に目を突っ込みなさい」。

聞いたことを、耳の中に目があるかのように、自分がそこに立ち会って 目の前で目撃しているかのように、そのように 心の目で見なさい、と語るものです。そのために何より大切なのは、聖書の言葉や出来事を評論家のように遠巻きにして眺めるのではなく、そこに自分自身の身を置いて読むことだと思います。身を乗り出して、中に踏み込んで読むことです。そのとき、いのち^{あふ}溢れる聖書の御言葉が私たちをそのただ中に引きずり込み、真実 生きた言葉として、私たちの内に臨みます。私たちの内に神の出来事を起こし、真^{まこと}のいのちを注いでくれます。そうして、私たちは 神のドラマを身をもって生きるのではないのでしょうか。

今月の聖書の箇所は、イエス・キリストがバプテスマのヨハネの前に姿を現わされた後、公^{のち おおやけ}の生涯を本格的に踏み出される その第一歩を記した箇所です。前回、主イエスはバプテスマのヨハネの前に姿を現わされました。「その翌日」(35) と、聖書は記します。そして 早速、人々とイエス・キリストとの出会いの出来事を語り始めます。その第一は、12 弟子の一人「アンデレ」です。今月は、このアンデレの人となりを通して、彼の出会った主イエスとはどんなお方だったのか、そして その主イエスはアンデレの内に何を起こされたのか、聖書の信仰の基本に触れる事柄を学んでいきたいと思います。

今回 登場するアンデレは、聖書の記事に見るかぎり、イエス・キリストに従った最初の人物です。ちなみに、37 節に「二人の弟子 [が]・・・イエスに従った」とありますが、あとの一人は(同じく 12 弟子の一人になる)ヨハネとも言われています。35 節を見ると、ふたりはバプテスマのヨハネの弟子たちだったと記されています。バプテスマのヨハネはイエス・キリストを見て、自^{みづか}らの弟子を主イエスに従わせます。何事かのために人を集めること自体、そもそも 容易なことではありません。が、一度 自分のもとに集めた者たちを自分以上の人物に手放すのは、さらにも増して至難の業と言えるでしょう。バプテスマのヨハネは、まさにそれをしたのでした。改めて、バプテスマのヨハネの偉大さを思わされます。

アンデレたちは、イエス・キリストの後^{あと}についていきます。そのとき、ふたりに気づかれた主イエスが口を開かれます。38 節、「何を求めているのか」。イエス・キリストは、あれやこれやの小賢^{こざか}しい処世術を説きに來られたのではありません。「人づき合いをどう うまくやっていくか」「ストレスを発散させて、気分転換をするにはどうしたらいいか」。そんな浅薄なテクニックを教えに來られたのではありません。「本物の人生を生きるには 何が一番大切で、何が欠かせないのか」。主イエスは、私たちのいのちに関わる そうした最も本質的で最も基本的な真理を示すために來られました。ですから、真つすぐ、ストレートに問いかけられます。「何を求めているのか」。ヨハネによる福音書が記す、イエス・キリストの第一声です。私たちが聖書に向かうとき、そこで問われるのはこの問いにほかなりません。「何を求めているのか」。それは すなわち、こう問うことでもあります。「私は、真実 求めるべきものを求めているだろうか。私はいったい、何を求めているのだろうか」

アンデレたち・ふたりの求めるものは まさに、彼らの人生を本物にしてくれる、彼らのいのちを

本物で満たしてくれる そうした真実なものだったのではないのでしょうか。ことは、道端の立ち話で済むような問題ではありません。自分たちの生き方がかかっています。一晚 語り明かしても足りないような問題です。「先生・・・どこに泊まっておられるのですか」。38 節の 返す言葉の内に、彼らの真剣さが読み取れます。

こうして、主イエスと夜通し語り明かしたアンデレは ついに、求めていたものを見つけたのにちがいません。聖書は、アンデレが翌日 何をしたか、記しています。41 節、42 節、「彼は、まず 自分の兄弟シモンに会って、『わたしたちはメシア・・・に出会った』と言った。そして、シモンをイエスのところに連れて行った」。うれしくてうれしくてしかたなかったのでしょう。夜が明けると 何はさておき、すぐさま兄シモン・ペトロのところに行き、ペトロを連れて、またイエス・キリストのもとに引き返します。探していたものを見つけたアンデレの興奮が伝わってくるようです。

とはいうものの、本日の箇所では聖書が記すアンデレの姿は、言ってみれば それだけです。何か劇的なことをしたわけでもなければ、大向こうを唸らせるような演説をぶったわけでもありません。実際、聖書の記すアンデレは、舞台の中央からはほど遠い人物です。そもそもその紹介の仕方からしてほとんどの場合、「シモン・ペトロの兄弟、アンデレ」と、兄ペトロの名を介して紹介されています。40 節にあるとおりです。あたかも 兄ペトロの陰に生きる人物のようでもあります。

いったい、アンデレとはどんな人物だったのでしょうか。主イエスが小高い丘で人々に話されたあの「山上の説教」の場面を思い浮かべてみましょう。自分もその場にいたとしたら、アンデレのどんな姿が目にとまるでしょうか。弟子たちがいました。何千人もの人々がいました。皆、食い入るように イエス・キリストの言葉に耳を傾けています。「では」と、アンデレの姿を探します。と、気づかされるのです。「どこにいるんだ、アンデレは？」と。福音書の記事から思い浮かべるかぎり、アンデレの姿は容易に見えてきません。実際、「その場にいた何人がアンデレの存在に気づいたのだろうか」、そう思われます。行動力があり、派手で目立つペトロの姿は、すぐにも思い浮かびます。血気盛んなヨハネや元・革命家の熱心党のシモンも、絵にするに難しくはありません。しかし、ことアンデレとなると、その姿がなかなか見えてこないのです。山上の説教の丘でもおそらく、辺りを見回し、振り返り、そしてやっと「ああ、そこにいたのか」と気づかされる、そんなぐあいだったのではないのでしょうか。アンデレとは、そんな人物でした。

アンデレは一貫して、舞台の袖にいる、舞台の陰に映る そんな人物でした。大舞台や劇的な場面には、アンデレの姿はほとんどありません。イエス・キリストの姿が変貌したという「山上の変容」のときも、そこに アンデレの姿はありませんでした。会堂長ヤイロの娘の 甦りのときも、彼の姿はありません。そして、最後の十字架を目前にしたあのゲッセマネの園での祈りのときも やはり、そこにアンデレの姿はありませんでした。これらはいったい、何を意味しているのでしょうか。それは、少しばかり人間的な言い方をすれば、アンデレは主イエスの側近の輪には入っていなかったということです。こういう言い方は、私の大嫌いな言い方の一つです。けれども、世間的に見れば、確かにそういうことになるのでしょうか。

考えてみてください。アンデレこそ、誰よりも先に最初にイエス・キリストに出会い、誰よりも先に最初に主イエスに従った人物です。実際、初代教会では、アンデレを称して「初めに呼び出された者」と呼んでいました。言ってみれば、イエス・キリストの画期的な新運動の創設委員第1号とも言える、そんな人物です。先輩・後輩の関係からすれば、当然、グループのリーダーになってもおかしくない人間です。そのアンデレが常に側近の輪の外に、しかもアンデレあってこそ初めてイエス・キリストに出会えた、その兄ペトロの陰に置かれていたのです。私たちは誰しも、「何らかのかたちで認められたい。そのしるしに、何がしかの御褒美ごほうびをもらいたい」と思うのではないのでしょうか。そして、「できれば、あの人より少しでも上の地位に就いて、少しでも多く報酬をもらいたい」と競争心が頭をもたげるのもまた、人の偽らざる本心ではないのでしょうか。アンデレとて、割り切れない思いがあっただろうと思います。誰も文句を言えない、十分な資格と条件を持っていたのですから。加えて、兄ペトロの存在です。教育の世界ではしばしば、「一人の非行児がいるところ、そこにはもう一人、異常児がいる」と言われたりします。すなわち、ひねくれ者の弟がいるところ、そこにはしばしば優秀な兄がいるというのです。いつもいつも目立って派手な、そして優秀な兄ペトロの陰に置かれていたアンデレの思いはいったい、どんなものだったのでしょうか。私たちの様々な卑屈ひげと思ひ比べて、つくづく考えさせられます。

かつてあの福澤諭吉ふくざわ ゆきちは、国家に尽くした功労を褒めたいと政府から言われたとき、次のように答えたと言われています。

人間が当たり前の仕事をしているのに、何も不思議はない。車屋は車を引き、豆腐屋は豆腐をこしらえ、当たり前の仕事をしている。褒めるといふなら、まず隣の豆腐屋から褒めてもらわなければならぬ。そんなことは一切よしなさい。

しかし、考えてみれば、こんなことが言われなければならないということ、そのこと自体がそうでない現実を物語っているとも言えるでしょう。つまり、どこかで形に現われた、いわゆる見える業績ばかりで人を採点しまた自分自身をも評価する、そんな癖が私たちの内からどうにも抜け切れない現実です。私たちの貧しい姿の裏返しとも言えます。そして、私たちがしばしば耳にする寂しい自己卑下ひげ。すなわち「こんな私なんか、どうせ」という寂しい卑屈な自己卑下も、実は、こうしたところに根があることを知ります。私たちはいつも、形に現われた見える業績を、しかも派手で目立つしるしを人と比較して求めたがります。そして、多くの場合、それらは大して意味もなく大して尊くもないのに、人との虚しい比較むなの中で時に喜び時に自己満足し、また時に落ち込んで自己卑下に陥ります。「あれもできない、これもできない。人目につくことの何一つできないこの私なんか、どうせ」という寂しい眩つぶやきは、実は、こうした虚しい比較の中から顔を覗かせてくるのではないのでしょうか。

しかしながら、そうした眩きは良きものから私たちの目を塞ぐことはあっても、開かせることはありません。本当に素晴らしいもの、本当にうれしいこと、本当に感謝な良いものから、この私たち

の目を塞いでしまいます。そして、「あなたはあなたでいいのだ。人真似ひとまねをする必要などない。人と比べる必要などないのだ。あなたはあなたでいい、それでいいのだ」と、この私を「良し」として受け止めてくださる、その大きなお方の大きな愛と恵みから目を塞いでしまいます。

そんななかであって、しかし、少なくとも聖書に記された、聖書に見るアンデレは違っていました。アンデレには、私たちのような卑下や卑屈は感じられません。いわゆる側近に取り立ててくれなかったそのイエス・キリストに対する恨みも、また、いつも自分より目立つ格好のいい兄ペトロに対する恨みも伝わってきません。そこにあるのは、自分のできること、自分のすべきことを精いっぱい最善にしていく、そんな彼の淡々とした姿です。ただそれだけです。たしかに、アンデレにも、どこか割り切れない思いのした時があったかもしれません。悩みと葛藤の時があったかもしれない。けれども、私たちの前に紹介されるその姿は、なんとも遜へりくだった、なんとも心の行き届いた、そしてなんとも素朴で素直な姿です。なぜなのでしょう。それこそ、彼・アンデレが主イエスというお方に会って、そこで与えられ、養われていったものではないか。そう思われます。それは、見える形の目立った業績をどれだけ上げたか、見える形でどれだけ人の上に立ったか、優劣競争の戦いにどれだけ勝ったかなどという、この私たちがすでにいやというほど慣れ親しんできたそうした業績主義や成績主義で人を見ることを決してなさらないそんなイエス・キリストに出会って、そこで養われ、そして豊かにされていった彼・アンデレの信仰の姿だったにちがいない。私はそう思われています。

主イエスが大切にされて喜ばれるのは、外側の飾りを取り去ったただ素朴で単純な私たち自身であり、私たちそのものです。イエス・キリストは、私たちそのものに歩み寄ってくださいます。私たち自身・私たちそのものをそれぞれそのままかけがえのない存在とし、かけがえのない宝物としてくださる。イエス様とは、そんなお方です。アンデレはそんなイエス・キリストに出会い、そんな主イエスと一緒に生きることで、そのことを日ごとに深く知らされていったのではないのでしょうか。そして、そのように愛されてかけがえのないものとされているその自分を、彼自身もまた喜んで受け入れ、大切にしていっていったのではないか。そう思われます。

神様の目に尊いものとは、いったい、何なのでしょう。話は飛びますが、以前、先天性小児麻痺しょうにまひの重症で生まれた知恵遅れで口の利けない娘さんを持つ一人の主婦の方の投書が新聞に載っていました。その方は、そうした障がい児を持つ親御さんの苦悩の心情を次のように記しておられました。

彼女がこの世に生を受けて以来、夫婦が犠牲を受けるのは当然としても、長男にも重荷となり、婚期まで逸して、妹の面倒を見てくれる。天は人間を平等につくっておられると思いながら、現実には、五体満足な人と身障児とでは苦しみ、悩み、痛みの重みに差別があるように思えることがあるのです。

重荷を実際に背負っている者でなければ本当は決して分からない、深い苦悩の言葉です。が、それでもなお、この後のこの方の言葉は最も大切な一つのことに私たちの目を向けさせてくれる、本当

に感謝な言葉だと思わされます。投書の女性は こう記しておられました。

しかし、この違いこそが 実は、天がわたしたち人間に与えた^{しん}真の平等ではないかと心を慰めており、その苦悩を恥じらい、痛みを耐え抜く試練を通して、個人としても家族としても、生きる尊い人間としての基本理念と絆^{きずな}を与えられるように思うのです。

私は、障がいや天によって与えられた、すなわち 神によって与えられたとは考えません。しかしそれでもたしかに、一見 重荷としか見えないそのようなことを通して かえって逆に、見える障がいなどにいっさい囚^{とら}われることなく、ただただ「その人自身」に目を向けてくださる神様の^{まなざ}眼差しを、投書の方と同じように教えられる思いがします。外側の見えるあれこれなぞにいっさい囚^{とら}われることのない神の眼差しです。そのようにして、飾りや障がいなどに目を惑わされることなく、一人ひとりの「その人自身」を等しく見てくださる そのような神様の眼差しに「神の平等」を見ることができると。投書の方と同じように、そのように思われるのです。神の眼差しは何よりもまず、あれこれの飾りをすべて取り去った 裸の私たちそのものに熱く注がれています。私たちの一人ひとりがまずもっていとおい存在だからです。私たちがもし 見える違いで他人を見下すようなことがあるとすれば、そうする私たちこそ、貧しく傲慢な者とされるのではないのでしょうか。

今、一つの言葉を改めて思い返しています。印象的な、私の好きな言葉の一つです。

兄弟姉妹、ぜひ憶えていたいのです。キリストの十字架の足もとでは まさに、その地面は平らなのです。そこに、上下の高低はありません。

教会の「入会式」の折に、ある牧師が言われた言葉です。アンデレがイエス・キリストの内に見たもの、それは何よりもまず「裸のこのままで、この自分がそっくりそのまま大事にされている。華々しさとは無縁のところでも、なおこのままで、そっくりそのまま愛されている」という この神の愛であり、この神の愛の内に包まれている感謝と安心だったにちがひありません。大切なのは、人より目立つ華々しさではありません。神の恵みに安心して身を浸す、その素朴で単純な、そして平凡な信頼と感謝ではないのでしょうか。

アンデレは、そのことを体で知っていました。ですから、「どうせ、こんな自分なんか」という卑屈な劣等感の眩きは、その口から聞こえてきません。実際、これほど不信仰な言葉はないことを、私たちはいつも憶えていたいと思います。なぜなら、それはまさに、愛の神様に向かってこう呟くことにほかならないからです。「あなたがこの世に生を与え、生かしておられる、あなたの^{みわざ}御業であるこの私の中には何の良きものもないじゃないですか」。神が愛してくださり、神が良しと言ってくださり、神が御自身にとって何より尊いと言い切ってください。そのために独り子イエス・キリストを与え、命の極みまで私たちに愛し抜いてくださったそんな神の宝物であるこの私たちに何の価値も、何の良きものも、何の素晴らしいものもない、というのです。私たちにかけが

えのない命を与えてくださっているその神様に唾^{つば}を吐くようなものではないでしょうか。

主イエスにあっては しばしば、平凡こそが非凡とされます。実際、私たちがよく口にする「何か 仕事をした」という意味では、アンデレはいったい、どれだけの仕事をしたのでしょうか。聖書の記すかぎりでは、ほんの 3 つほどしか見つけることができません。しかも、その 3 つできえ、一見 目立たない、ほんのちょっとしたことばかりです。今月の箇所はそのうちの一つです。バプテスマのヨハネの弟子だったアンデレがもう一人の弟子と共にイエス・キリストに出会い、主イエスのもとで一晩を過ごします。そして 翌日、自分の兄 シモン・ペトロをイエス・キリストのもとに連れてゆき、主イエスに引き合わせる。これが 今回のすべてです。アンデレのしたこととは、ただそれだけでした。あとの 2 つも 同様です。一つは、ガリラヤの丘でのこと。イエス・キリストが 5 つのパンと 2 匹の魚で 5,000 人の群集に食事を与えたという、あの場面です。しかし それとて、アンデレが何をしたというのでしょうか。「こんなに大勢^{おおぜい}の人では、何の役にも立たないでしょう」(ヨハネ 6:9) と、半信半疑で迷いながら、子どもの持っていたパンと魚を主イエスに差し出した。ただそれだけです。残る一つも 大差ありません。イエス・キリストが十字架を目前にして、エルサレムに入城されたときのこと。「イエスにお目にかかりたいのですが」(ヨハネ 12:21) と面会を申し出てきた エルサレム訪問中のギリシア人 2 人を主イエスに取り次いだ。やはり、ただそれだけでした。アンデレのしたことと言えば、ただこれだけのことでしかありません。そもそも、アンデレはさほどの意識もせず、むしろ 何気なくこれらのことをしたように読み取れます。おそらく、アンデレは何をするにつけても、自分のすることが何か大きなことを引き起こすとは夢にも思わなかったのではないのでしょうか。文字どおり 気負わず、ごく普通のこととして、淡々とそうしたように思われます。

しかし、問題はその淡々とした気負いのなさであり、そこに見られる こだわりのない素朴さと素直さです。アンデレの思いをはるかに超えて、いったい そこに何が起こされていったか。問題は、そこにこそあるように思います。兄ペトロはこの弟の取り次ぎを通して初めて イエス・キリストに出会い、そこから 弟子たちの柱とされ、初代教会の柱とされていきました。また、あの 5,000 人が養われたのも、たとえ半信半疑で迷いながらであっても、子どもの持っていたパンと魚をとにかく取り次いで主イエスに手渡した そのアンデレの姿があったからこそです。そしてまた、アンデレこそ実は、初めてユダヤ人以外の異邦人をイエス・キリストのもとに連れていった「異邦人伝道」の先駆者でもありました。世界中に伝えられた主イエスの福音は、アンデレの気負いのないちょっとした取り次ぎから、最初の一^き粒が蒔かれたのでした。私たちはしばしば、外側を飾る華やかさに目を奪われ、神様の下さる良きものを見過ごしにすることがあります。けれども、神の下さる良きものは、私たちすべての内に例外なくあるように思うのです。その最も大切なもの、最も根本的なものが、感謝のうちただ素朴に単純に 一所懸命に生きるという、その姿そのものなのではないのでしょうか。アンデレはそのようにして、淡々と生きました。そして、時に知らずのうちに、時に半信半疑のうちに、しかしそれでもなお、大切な神の業を取り次いでいったのでした。そもそも、兄ペトロが教会の柱になり、いわゆる大きな仕事をしたからといって、弟アンデレのいわゆる小さな働きとの間に価値の上下

など ありはしません。

アンデレの素朴な、地味な、ありのままの感謝と感動。私たちが往々にして忘れてしまうものではないでしょうか。イエス・キリストはそれらを与え、そして用いてくださいます。「どうせ、こんな取るに足らない感動なんか」「どうせ、こんな私なんか」と、ついつい大切なものを見過ぎにし、通り過ぎにしてしまう私たちです。私たちの鈍さであり、私たちの卑屈です。主イエスの愛に 恵みに、そして感動に 感謝に 繊細で敏感な私たちでいたいと思います。そして、たとえ半信半疑であっても、また周囲の 嘲りのなかにあっても、心を惹きつける主イエスの語りかけに なにしる自分を差し出してみる。そんな私たちでありたいと願います。実際、アンデレがパンと魚を差し出したとき、彼の内には半信半疑の思いがありました。しかも、彼の周囲には 嘲りの声もあつたにちがいません。しかし アンデレは、それでもなにしる 差し出したのでした。そのとき、神御自身が事を起こしてくださいました。私たちにもまた、神様が御自身の事を起こして下さるのではないのでしょうか。

ダサイほどに真つすぐで素朴な人、アンデレでした。泊まり込んでまで真実を求めた求道の人、アンデレでした。人との比較に生きず、自分らしさに生きた人、アンデレでした。小さなことにも誠実な人、アンデレでした。決して劇的でない。目立った存在でもない。地味で静かな平常心のなかに信仰が息づいた人、アンデレでした。主イエスはそのアンデレとまちがいに共についてくださり、御自身のいのちを そこに注いでくださいました。

言い伝えによれば、アンデレは紀元 60 年、ギリシアのパトラエで殉教の死を遂げたと言われています。十字架刑による死でした。そして、その十字架は「X形」をしていたと伝えられています。今日、「聖アンデレの十字架」と呼ばれているものです。その十字架の形「X」は、ギリシア語の「キリスト」の頭文字でした。淡々とした目立たない歩みながら、最後までイエス・キリストから離れず、背に主イエスを負い続けて、主イエスと共に歩き続けた彼・アンデレの姿を彷彿とさせる言い伝えではないでしょうか。彼・アンデレの「光栄の冠」とも映る言い伝えではないでしょうか。このようにして アンデレは、兄ペトロをイエス・キリストのところに連れていったことで、最初の「家族伝道者」、最初の「国内伝道者」となりました。そしてまた、ギリシア人を主イエスに取り次いだことで、最初の「国外伝道者」ともなったのでした。

このとき、私たちもまた、アンデレの一人なのではないのでしょうか。華やかなこと、それは、この私たちが何という名前の人間かを教え、知らせます。しかし、目立たないこと、それは、この私たちがどんな質の人間かを語って示します。神の目に真実 喜ばれるのは、小さなことにも感謝と献身とを知っている者にほかなりません。イエス・キリスト御自身が父なる神への感謝と私たちへの献身に生き、華やかさと無縁のところへ すべてを 献げ尽くして、低く生き抜かれたからです。その主イエスが今も生きて、この私たちの傍らに立ってくださっているとしたら。そして、アンデレに注がれたと同じ眼差しをもって、今、この私たちのところにも臨んでくださっているとしたら。「神に受け止められ、憶えられている感謝を素朴に表わしたい。うれしい笑顔を飾らず、素直に表

わしたい」。私は そう思われます。そして、神の起こしてくださる「神の出来事」を待ちたいと思います。

〔祈り〕

飾りも何もないアンデレそのものをいとおしみ、大切にしてくださった 慈しみの神様。

裸の私たちそのものを受け入れてくださる 恵みの神様。

あなたの顧みを心から感謝いたします。あなたが独り子 イエス・キリストを献げ切るほどに、それほどまでに大切に思っているこの私を 自分自身が嫌って卑下することのないよう、あなたの御心^{みこころ}に常に目を開かせてください。そして、目に見えるあれこれ^{きた}で互いを評価し、裁くことのないよう、あなたの目を私たちに与え、私たちの信仰を養ってくださいますように。

この日もこの週も、また来るべき日も来るべき週も、備えられた時と所のすべてに誠実な心を注いで向かいたいと思います。私たちのなす小さな一つひとつを、どうか、あなたの御心の通り管としてお用いください。

愛する御子 イエス・キリストの御名^{みな}によって願い、お祈りいたします。

アーメン